

## Oliver Twist と救貧院

吉田 一穂

### 序

*Oliver Twist* (1838-39)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の二番目の長編小説で、1837年2月から1839年4月まで自身が編集長を務める *Bentley's Miscellany* に連載物として執筆された作品である。執筆開始当時、ディケンズは自信とエネルギーにあふれた25歳の若者であった。彼は *The Pickwick Papers* (1837)ですでに人気のあるユーモア作家としての成功を収めていたにもかかわらず、<sup>1</sup> ハンプリー・ハウス(Humphry House)が指摘しているように、人気のあるユーモア作家としての成功に甘んじることなく、新しいテーマに基づく作品を書き始めたのである。すなわち、ジャーナリストとして訓練されたディケンズは、時事問題に反応し、特に1834年の新救貧法について書くことを企画した(House v)。

このように企画された作品であったが、作品の構成面やオリヴァーの人物像は、多くの批判にさらされてきた。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は、偶然やにわか仕立てに依存するプロットを批判し(Wilson 112)、ゴム(A. H. Gomme)は、ディケンズが救貧院の子供たちへの悪影響を描き出そうとしたにもかかわらず、オリヴァー自身にそういう影響がない点を作品の弱点と感じている(Gomme 95)。

事実 *Oliver Twist* において、オリヴァーは、救貧院や犯罪者層の悪影響によって変化してしまうこともなく、最後まで善の心を持ち続けるがゆえに、生気に乏しく、その単純さ、善良さは、説得力を欠いていると思われる側面を持っている。しかしながら、オリヴァーが作品の所々で示す心理状態は、社会の被害者としての心理状態であり、決して説得力を欠く描写となっていないことに注意しなければならない。可哀相な孤児の少年オリヴァーの姿により、ディケンズが作品の主題である社会問題の解決に寄与しようとしたことこそ作品を読む上で考慮に入れておかなければならない側面である。本論文では、作品の前半部分でオリヴァーが入れられる救貧院に焦点を絞ることにより、救貧院と被害者としてのオリヴァーとの相関関係を提示したい。

### 1. 1834年の改正救貧法

*Oliver Twist* における救貧院について考察する前に、まず1834年の救貧法の大改革について述べておく必要がある。1834年に行われた救貧法の大改革は、産業革命後の社会変化に合わせてこの法を現実的に機能させるためのものであった。しかしその結果は、貧者や弱者に、より厳しいものとなり、法は改悪されたのであった。そもそもこの救貧法の改正

は、貧しい労働者の側にたったものではなく、救貧税を負担している側からのものであった。なぜなら、十分な生活費を稼げない労働者に部分的に生活費を補う院外救済は、中産階級以上の人々の救貧税の負担を重くしていたからだ。それゆえ新救貧法により、働くことのできる労働者には、生活費の給付は打ち切られた。さらに劣等処遇の原則(the principle of less eligibility)により、救貧院内の生活は、院外の労働者の最低生活に劣る水準と定められた。したがって、救貧院に入ることは、院外での最低生活を越えない悲惨な生活が待っていた。労働者たちは、救貧院に入るにしても、外で働くにしても、最低限の生活にあえぐことになる。

周知のように、改正法は主要な点で 1832 ~ 34 年の「救貧法調査委員会」(Poor Law Inquiring Commission)の報告書の勧告の線に沿ったものである。同報告書において勧告された貧民政策の原則は次の3つに帰着すると言われている。すなわち、(1)全国的統一性の原則(the principle of national uniformity)、(2)劣等処遇の原則、(3)労役場制度(the workhouse system)がそれである。このうち、第一の原則にかかわる同法のもっとも重要な規定は、恒久的な中央救貧行政当局の設置である。この新しい行政部門は救貧法委員(Poor Law Commissioners)、書記(Secretary)、副書記(Assistant Secretary)からなり、その下に、教区連合(Union)における貧民救済委員会(Board of Guardians)、各教区の貧民監督官(Overseers)が従属した。そうして中央当局はその指導監督のもとに地方の救貧行政を統制する権限を付与された。救貧行政の中央集権化によって、従来の教区を中心とした行政の不統一を廃し、貧民処遇の全国統一をはかることが意図された(Pool 356)。しかし、実際には救貧委員会は、貧民救済委員会を完全に統制していたわけではなく、貧民救済委員会は、古く不適切な救貧院を変えたり閉鎖することを求められはしても、新しい救貧院を建てるよう強いられることはなかった。それでも、新救貧法ができて最初の5年間、特にイングランドの南部において約 350 もの新しい救貧院が建てられた(Royle 183)。

最初の救貧法についてはエリザベス朝時代にまで遡り、それぞれの教会区(parish)の民生委員(overseer of the poor)に対して、貧者や病人や高齢者や貧しい児童の救済を行うことを要求するものであった。しかし、1834年の新しい救貧法の目的は、貧者が宿泊する救貧院を単なる怠け者で救済を受ける資格がないと思われる多くの人々の目から見て、極端に魅力のないものにすることであった。そのために救貧院内で強制されるようになった一斉労働や過酷な生活があまりひどいものだから、貧しい人々のあいだでは、救貧院という言葉が「不幸」の代名詞となったほどである。この新しい制度のもとでは、それぞれの教会区で民生委員に代わって選出された貧民救済委員会の仕事を、ロンドンの中央理事会が監督するという仕組みとなっていた(Pool 393)。

1834年以降、このように怠け者が悪用するのを防ぐという名目で、救貧院は信じられないほど悲惨なものに変えられていったが、具体的に人々はどのような扱いを受けたかというところ、一度この敷地内に入れば、夫と妻は別々にされ、子供は親から引き離され、収容者はみな、気の滅入るようなユニフォームを着なければならなかった。トランプもなければ

タバコもなく、労働といえば、石を砕いたり、まいはだ(oakum)を作ったりすることである。1833年以降、救貧院で死亡した者の遺体で引き取り手のないものは、解剖のために解剖学者に引き渡されることになった。貧しい人々は、この救貧院を憎み恐れた。

ディケンズは、*Our Mutual Friend* (1865)において救貧院を憎み恐れる人々の心境をベティ・ヒグデン(Betty Higden)の言葉により表現している。「わしは、あそこに連れて行かれるくれえなら死んだほうがましですわい」(199)、「おいらは一生教区と張り合って、逃げて逃げて生きてきただよ。死ぬときも教区の世話になりたかねえだ！」(509)と言うベティ・ヒグデンの最大の願いは、救貧院の世話にならず静かに世を去ることであった。ディケンズが教区委員をサマリア人にたとえていることは、アイロニーであって、ベティ・ヒグデンにとって決して教区委員は、救済者となりえないのである。ディケンズは *Our Mutual Friend* の前に *Oliver Twist* においてすでに貧民にとって真の救済となっていない救貧院と教区委員について描写している。次に *Oliver Twist* において救貧院がどのように描写されているかをみていきたい。

## 2. 作品における救貧院の描写

ディケンズは第1章において、まずオリヴァー・トウイストの誕生から物語を始めている。オリヴァーの誕生は、救貧院にとって「新しいお荷物」(“a new burden”)(2)であり、決して祝福されたものではなかったのである。オリヴァーの母親は、前の日に通りに倒れているところを見つけられ連れて来られたが、オリヴァーを産むとすぐ死んでしまう。このようなオリヴァーは、生まれてすぐ孤児となるが、ディケンズはオリヴァーの境遇について次のように描写している。

What an excellent example of the power of dress, young Oliver Twist was! Wrapped in the blanket which had hitherto formed his only covering, he might have been the child of a nobleman or a beggar; it would have been hard for the haughtiest stranger to have assigned him his proper station in society. But now that he was enveloped in the old calico robes which had grown yellow in the same service, he was badged and ticketed, and fell into his place at once a parish child the orphan of a workhouse the humble, half-starved drudge to be cuffed and buffeted through the world despised by all, and pitied by none. (3)

ポール・シュリック(Paul Schlicke)も考えているように、人を特徴づける衣服の力の描写は、カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の *Sartor Resartus* (1836) の影響を暗示していると言えるかもしれない(Schlicke 431)。なぜならば、カーライルは *Sartor Resartus* の中で、「衣服は我々に個性を、差別を、社会組織を与えた」(32)、「社会は衣服の上に建設

されている」(48)と述べているからである。オリヴァーの場合は、作品の最初に使い古されて黄色くなった古キャラコの長着を着せられることにより、彼が救貧院の孤児であることが鮮明になる。

救貧院で人工栄養で育てられた後、オリヴァーは救貧院の支所である養育所、教区の子供たちの養育係のマン夫人の元へ預けられ、<sup>2</sup> 9歳になった後、救貧院に戻される。救貧委員会の中の一人の委員は、オリヴァーに「お前は明日の朝6時にまいはだを作り始めるのだ」(“you’ll begin to pick oakum to-morrow morning at six o’clock”)(10)と言うが、ここでディケンズは、救貧院内の労働としてまいはだ作りが課せられていたことを示している。ディケンズは、さらに救貧院が改正された経緯を述べている。改正される前の救貧院は貧民階級の公衆娯楽の場所であり、金を払わなくてもよい旅館であり、年がら年じゅう官費の朝飯や、昼食や、お茶や、夕食が出て、遊んでいればよい、煉瓦と漆喰でできた極楽であった。このような現実を目の当たりにし、委員会の委員たちは、矯正が必要であるとの認識から、規則を設けて、すべての貧乏人は、救貧院に入らないで、急速に餓死するか、そのいずれかを選ぶべきであるとした、とディケンズは説明している。<sup>3</sup>

救貧院の食事に関しては、カロリーの少ない食事は、新しいシステムの顕著な特徴であった。ディケンズが描く、「1日3度の薄がゆの食事、1週間2回たまねぎがつき、日曜ごとにロールパン半分がつく」(11)食事は、委員たちが勧めた規定食の諷刺である。1836年に公布された強健な男性に対する1番目の規定食は、1週間に3日のみ肉がついていて、毎日は薄がゆ1.5ポイントであった。女性たちはもっと少なく9歳以下の子供たちも女性たちと同様であった(House xiii)。

*Oliver Twist*において育ち盛りの少年たちは、飢えに苦しめられている。ついに彼らは飢えて正気でなくなり、年の割に背の高い少年がもし毎日もう一杯粥を食べなければ、となりにいる弱々しい年端のいかない子供を食べてしまうかもしれないと言う。そのため会議が開かれ、誰が院長のところへ進み出て、もっと下さいと頼むかということで、くじが引かれ、結果としてオリヴァーがその役割を務めることとなる。椀と匙を手に、院長のところへ進んで行ったオリヴァーが「お願いです、僕もう少しほしいんです」(“Please, sir, I want some more.”)(12)と言う場面は、この作品における最も印象的な場面である。注目になることは、やせた少年たちと対照的に院長が太った健康な男であることだ。ディケンズはコントラストを用いることにより、少年たちが飢えていることを強調している。もっとほしいと要求したオリヴァーは、監禁されることとなり、翌朝、門の外側に貼札が貼り出され、そこには、オリヴァー・トウイストを救貧院からひきとる者には、誰にでも5ポンドの礼金を提供すると書かれる。

オリヴァーがもう少し欲しいと要求したことは、委員会がオリヴァーを年季奉公に出す格好な理由となる。オリヴァーのような貧民の場合、9歳を過ぎるとそれ以後21歳になるまでは、委員によって本人の承認なしに年季奉公に出されることがあった。子供の承認を得る必要がないので、教会区にとって、彼を粗暴な煙突掃除夫ガムフィールド(Gamfield)

のような男の手にこっそり売り渡すことはいっそう容易であった(Pool 241)。幸い、オリヴァーは、少年が徒弟として煙突掃除をしなければならないときに、二人の治安判事の面接を受けて「自分からすすんで煙突掃除の仕事をしたと思っている」ことを宣言しないとイケないという法律に助けられる。なぜならば、オリヴァーはひざまずき、煙突掃除夫のところへ追いやらないで下さいと治安判事に懇願するからである。当時、年季証書は、二人の治安判事によって承認されなければならないという規定があったので、オリヴァーを救貧院に返して親切にするようにという治安判事の計らいにより、かろうじてオリヴァーは、煙突掃除を逃れることができたのである。

救貧院に連れ戻されたオリヴァーは、最終的にサワーベリー(Sowerberry)夫妻の葬儀屋に徒弟奉公に出される。そこでサワーベリー夫人、ノア・クレイポール(Noah Claypole)、シャーロット(Scharlotte)からひどいしうちを受ける。特にノア・クレイポールからは、完全に下の人間だと見なされてしまう。ディケンズはその理由を次のように説明している。

Noah was a charity-boy, but not a workhouse orphan. No chance-child was he, for he could trace his genealogy all the way back to his parents, who lived hard by; his mother being a washer woman, and his father a drunken soldier, discharged with a wooden leg, and a diurnal pension of twopence-halfpenny and an unstateable fraction. The shop-boys in the neighbourhood had long been in the habit of branding Noah, in the public streets, with the ignominious epithets of 'leathers,' 'charity,' and the like; and Noah had borne them without reply. But, now that fortune had cost in his way a nameless orphan, at whom even the meanest could point the finger of scorn, he retorted on him with interest. (31-32)

ノアは、“charity child (boy)”である。“charity child”とは、裕福な寄進者によって設立された慈善学校に通う子供のことであり、こうした慈善学校の子供たちは、しばしば教会内の目立つ席に座らされ、その身分を示す特別なバッジと色付きの服を身に着けなければならなかった。彼らは、他の子供たちから残酷な嘲りを受けることがよくあった。引用文から嘲りを受けていたノアがさらに自分よりも卑しむべき地位にある救貧院の子供だという理由でオリヴァーを苛めて大いに悦に入っているという心境がうかがえる(Pool 284)。

ノアの虐待にずっと耐えていたオリヴァーであったが、母親のことを侮辱されることにより、彼の忍耐は限界に達する。

**'But yer must know, Work'us yer mother was regular right-down bad 'un.'**

**'What did you say?' inquired Oliver, looking up very quickly.**

**'A regular right-down bad' un, Work'us,' replied Noah, coolly. 'And it's a great**

deal better, Work'us; that she died when she did, or else she'd have been hard labouring in Bridewell, or transported, or hung; which is more likely than either, isn't it? ' (41)

母親のことを「あばずれ」呼ばわりされたオリヴァーは、跳びあがって、椅子とテーブルをひっくり返し、ノアの喉元をつかんで、怒りにまかせて、歯が口の中でガチガチ鳴るまで彼をゆすぶり、全身の力をはげしい一撃の中にこめて、彼を打ち倒す。この行為は、オリヴァーが後にロンドンに逃れる前段階の行為としての意味を持つ。すなわち精神の監禁状態を打ち破るという意味を持つ。ロンドンに逃れるオリヴァーの行為は、実質的に救貧院との決別となるが、精神の監禁状態を作った原因として、救貧院での扱いとともにバンブル（Bumble）氏による扱いも考慮に入れなければならない。

### 3. バンブル氏とオリヴァー

バンブル氏は、*Oliver Twist*の中では、非常に戯画化された教会の職員であるが、この教会吏(beadle)というのは、基本的には教会区の役員 of 全般的な補佐役で、秩序の維持にあたる巡査(constable)の補佐や、貧困に苦しむ人々の面倒を見る民生委員(overseer of the poor)の補佐を委任されていた。1834年に新救貧法が制定されてからは、救貧院の運営を手伝わせるために彼らを雇う教会区も登場した。彼らの制服を構成するものとして、印象的な杖と、金のレースで縁を飾った三角帽があった。こうした古めかしい格好は、この役職そのものが時代遅れになりつつあったことを示している。<sup>4</sup>

フィリップ・ホブスバウム(Philip Hobsbaum)は、バンブル氏について、「教区役員の一入でも教区吏員のたぐいでもない」と指摘し、ディケンズが Bumbledom (bumble = もったいぶった小役人)という言葉になる想像力のない官僚のたぐいに、彼の名を与えたと考えることがふさわしいと考えている(Hobsbaum 39)。<sup>5</sup>

ホブスバウムの見解は、作品におけるバンブル氏の行為を見れば説得力のある見解であると解る。第4章でバンブル氏は、サワーベリー氏に、自身のボタンを “The die is the same as the parochial seal the Good Samaritan healing the sick and bruised man” (24)と説明しているが、バンブル氏は良きサマリア人とは正反対の人物である。

例えば、バンブル氏は、オリヴァーを年季小僧に出すことに非常に積極的である。煙突掃除の年季奉公に出そうとする際に、彼は「お前は親がないから、親代りになって下さる親切なありがたい方々が、お前を年季小僧に出して、お前が世間で身をたてて、一人前の男になれるようにして下さるのだ」(18)と言うが、注目に値することは、そう言った後、「教区には、3ポンド10シリングの出費だがね」(18)と付け加えることである。彼は、教区の利害に敏感であるだけでなく、貧乏人に対して非常に冷酷なのである。また、オリヴァーがノアを葬儀屋で打ち倒した後、オリヴァーが気が狂ったと思っているサワーベリー

夫人に対してバンブル氏は、気が狂ったせいではなく食べ物<sup>6</sup>のせいだとし、次のように説明する。

**‘You’ve over-fed him, ma’am, You’ve raised a artificial soul and spirit in him, ma’am, unbecoming a person of his condition: as the board, Mrs. Sowerberry, who are practical philosophers, will tell you. What have paupers to do with soul or spirit? It’s quite enough that we let’ em have live bodies. If you had kept the boy on gruel, ma’am, this would never have happened.’ (46)**

「かゆを食べさせていたら、こんなことは絶対に起こりやしませんでしたよ」というバンブル氏の言葉は、救貧院の食べ物に関する哲学に基づいた言葉である。バンブル氏は、教区の利害にのみ敏感であるだけでなく、自身の利害にも非常に敏感な男である。バンブル氏は、新聞でオリヴァーの消息についての情報に謝礼5ギニー払うという広告を見、ブラウンロウ(Brownlow)氏を訪ねオリヴァーについて尋ねられるが、その内容は、オリヴァーが卑しいたちの悪い親から生れた棄児であること、生れたときから、裏切り、忘恩などの悪い性質しか見られなかったこと、彼が罪のない少年に卑怯な攻撃を加えて傷つけ、夜の中に主人の家から逃げ出したのが、生まれた土地における短い経歴の最後であったこと、等である。ブラウンロウ氏が、「これはあなたの情報に対するお礼としては軽少です。しかし、もしこの情報が、あの少年に有利なものでしたら、私はよろこんでこの3倍のお礼を差し上げただろうと思います」(125)と言った後、ディケンズは、バンブル氏の性質について、バンブル氏をもっと早くブラウンロウ氏の言葉を聞いたならば、オリヴァーの経歴を非常に変えて語ったであろうと説明している。

このようなバンブル氏は、救貧院の看護婦長コーニイ(Corney)夫人に言い寄る。バンブル氏は、救貧院の院長であり、かつてオリヴァーがもっと薄がゆを欲しいと要求したため彼を罰したスラウト(Slout)氏が亡くなった後、彼自身がコーニー夫人と結婚し、救貧院の院長の職につけると昇進について考えるからである。結果として、バンブル氏はコーニイ夫人と結婚し、救貧院の院長となるが、救貧院の支配権については彼の思惑どおりにいかず、<sup>6</sup>夫人に打ち負かされてしまう。ディケンズはバンブル氏が弱い者いじめをすることによるこびを感じる卑怯者であると述べ、「非常な尊敬と賛美を受けている多くの役人は、同様の弱点に悩んでいる」(270)と説明している。すなわち、ディケンズは、バンブル氏を役人の代表的人物としてとり扱っている。しかし、貧しい人たちの前でバンブル夫人に打ち負かされることによりバンブル氏は大変な屈辱を味わう。後にバンブル夫妻は、オリヴァーの素性を伏せることに関する共犯を認めざるをえなくなる。バンブル夫人がロケットとアグニス(Agnes)という語が彫刻してある指輪を売ったことを白状するからである。バンブル氏は、「どうか、この不幸な、些細なできごとが、わしから官職を奪うことになりませんように」(399)と不安な胸の内を吐露するが、ブラウンロウ氏は「どうしても、そういうこ

とになるでしょうな」(399)と言う。「これはみな家内のやったことです」(399)と責任回避するバンプル氏に対し、ブラウンロウ氏は弁解にならないと言い、法律はバンプル夫人が夫の指示に従って行動すると仮定するのでバンプル氏の方が罪が重いと言う。ブラウンロウ氏の言葉を聞いたバンプル氏は「もし法律がそう仮定するならば、法律は馬鹿です。阿呆です」(399)と言う。最終的にバンプル氏夫妻は地位を奪われて、次第に、ひどい窮乏と悲惨な状態に陥り、ついにかつて彼らが他の人々を威圧した、その同じ救貧院で、貧民になりさがる。ディケンズは、弱い者いじめをする役人の代表的人物バンプル氏に屈辱を味わわせることにより、因果応報を示している。

オリヴァーが家のない脱走者となってロンドンに向かうとき、彼は心の中で「ロンドン！あの偉大な大都市！誰もバンプル氏さえもそこでは彼を見つけることはできないのだ！」(50)と考えるが、精神の監禁状態を打ち破る意味を持つオリヴァーの脱出は、バンプル氏のような役人に支配されている教区や救貧院からの逃避であるとも言える。後にフェイギン率いる悪党団に引き入れられる運命にあったとしても、オリヴァーにとってこの逃避は、希望に満ちた逃避であると言っていい。

## 結び

以上、*Oliver Twist* の前半部分でオリヴァーが入れられる救貧院に焦点をしばることにより、救貧院と被害者としてのオリヴァーとの相関関係について考えてきたが、ディケンズは、1834年の改正救貧法とその犠牲になる人間の姿を描き出している。改正救貧法は、本質的に福祉改革の衣を着ながら、強健な貧困者が公的扶助にたよることをやめさせるため援助の額を縮小するという内容だった。救貧院の食事が貧しければ、貧困者は飢えと不快のためにいやおうなく仕事探しに出るものと考えられた。「お願いします、もう少しほしいんです」と言うオリヴァーは、改正救貧法の犠牲者としての姿を明示している。彼は精神の監禁状態を打ち破るべくロンドンに逃れるが、彼の精神の監禁状態はバンプル氏のような役人によっても作られる。尊大で利己的な小役人バンプル氏は、丸々と太り、貧者たちが飢えていることに無関心で自分の利益のみを考えて行動する人物である。オリヴァーがロンドンに逃れることは、バンプル氏のような人物に支配されている教区や救貧院からの逃避であるだけでなく、自発的意志により行動を起こしたという点で、積極的意味を持つ逃避でもある、と言っていいだろう。

## 注

- 1 ディケンズは長編小説 *The Pickwick Papers* を 1836 年 4 月から月刊分冊の形式で発表



し始めるが、最初は、評判も良くなく、その上挿絵画家ロバート・シーマーとの不和、シーマーの自殺などいろいろなトラブルに見舞われた。しかし、後任の画家をハプロット・K・ブラウン(フィズ)と決めてからは、作品は順調に進み、特に途中から登場したサム・ウェラーのおかげで、爆発的に人気が高まり、ベストセラーとなった。

2 ジェニー・ボーン・テイラー(Jenny Bourne Taylor)は、Foundling Hospital についての論文の中で、“Mrs. Mann’s baby farm is the under side of the Foundling Hospital’s own foster homes.” と述べている (Taylor 327)。

3 カーライルは、*Past and Present* の中で、救貧院の中にいる人々を、「彼らは、飢え死にしたいために、閉じこめられて、魔法にかけているのをよろこんでいる」と描写している。*Past and Present* においてある旅行者は、セントアイブズ(St. Ives)の救貧院をバステューユ監獄にたとえている。また、カーライルは、第4巻第1章で、“Millions enchanted in Bastille Workhouses” というという表現を使っている (Carlyle, *Past and Present* 2) *Past and Present* は、カーライル 47 歳のときの作品である。1843 年の年の初めからわずか7週間で一気に書き上げたものである。

監獄にたとえられる救貧院ではあるが、当時差し迫った事情で救貧院をたよらなければならない貧乏人がいたことは事実である。役人は、状況にかかわらず、差し迫った必要性のある場合、貧乏人を援助する義務があった。無視されたがゆえに死んだ貧乏人の調査を担当した行政官により、役人は職務怠慢と裁定される場合があった (Green 139)。しかしながら、収容後の被収容者にまったく問題がなかったわけではない。不品行、飲酒、故意の破壊行為など問題のある被収容者もいた。救貧院内において厳しい政策が実施されると、違法行為は、1837 年の 940 から 1842 年の 2596 まで増えた (Green 141)。このことは、救貧院の内部のあり方に対し貧乏人の反抗があったことを示している。1866 年に至っても貧乏人の反抗は止まなかった。*The Times* は次のように反抗的な貧乏人の様子を伝えている。

The pauper’s favorite mode of evincing a mutinous spirit is the destruction of their own clothing, but there is a pleasing variety in their attempt to annoy those who have sheltered them. Some obstinately refuse to get up in the morning; others become violent on being requested to break stones or to pick oakum in return for their night’s lodging; others, and especially women, assail the superintendents and matrons with the foulest language, out of malevolence. (*The Times*, 27 January 1866)

4 ダニエル・プールは、ディケンズの主要作品の中で、教会吏が擲楯の対象として描かれていないものを見つけ出すのが困難であるとの理由により、どこかの教会吏がディケンズの逆鱗に触れるようなことをしでかしたに違いないと考えている (Pool 267)。

5 *OED* において、bumbledom は次のように説明されている。

bumbledom: Fussy official pomposity and stupidity, especially as displayed by the officers of petty corporations, vestries, etc.; beadle in its glory.

ディケンズは、教区の役人から救貧院の院長に変わったバンプル氏を衣服と関連づけて描写しているが、次の箇所はカーライルの *Sartor Resartus* を思い起こさせる箇所である。

There are some promotions in life, which, independent of the more substantial rewards they offer, acquire peculiar value and dignity from the coats and waistcoats connected with them. A field-marshal has his uniform; a bishop his silk apron; a counsellor his silk gown; a beadle his cocked-hat. Strip the bishop of his apron, or the beadle of his hat and lace; what are they? Men. Mere men. Dignity, and even holiness too, sometimes, are more questions of coat and waist coat than some people imagine. (267)

6 バンプル氏は、男性の特権について、“The prerogative of a man is to command.” (269)と述べ、女性の特権について尋ねるコーニイ夫人に“To obey, ma’am” (269)と述べているので、ヴィクトリア朝時代の女性の理想像に関する固定観念を持っていると言える。

アルフレッド・テニソン(Alfred Tennyson, 1809-92)の *The Princess* (1849), Pt.V.からの一節は、ヴィクトリア朝時代の女性の理想像を明確に伝えている。

Man for the field and woman for the hearth;  
Man for the sword, and for the needle she;  
Man with the head, and woman with the heart:  
Man to command, and woman to obey;  
All else confusion.

Walter E. Houghton は、*The Victorian Frame of Mind : 1830-1870* で、“submissive wife”という表現を使っている (Houghton 348)。

#### Works Cited

- Carlyle, Thomas. *Past and Present*. London: Chapman and Hall, 1843.  
. *Sartor Resartus*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. New York: Oxford UP, 1987.  
. *Our Mutual Friend*. New York: Oxford up, 1991.
- Gomme, A.H. *Dickens*. London: Evans Brothers, 1971.

- Green, David R. "Pauper Protests: Power and Resistance in Early Nineteenth-Century London Workhouses", in *Social History* Vol.31. No.2. Ed. Janet Blackman, Keith Nield. Dorset: Taylor & Francis Group, 2006.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind: 1830-1870*. New Haven: Yale UP, 1957.
- House, Humphry. Introduction to *Oliver Twist*. New York: Oxford UP, 1987.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: A Touchstone Book, 1993.
- Royle, Edward. *Modern Britain: A Social History 1750-1997*. New York: Oxford UP, 1997.
- Schlicke, Paul. "Oliver Twist", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Taylor, Jenny Bourne. "Received, a Blank Child: John Brownlow, Charles Dickens, and the London Foundling Hospital Archives and Fictions", in *Nineteenth Century Literature*. Vol.56. No.3. Berkeley: University of California Press, 2001.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.
- 江藤秀一・松本三枝子、『イギリス文化・文学への誘い』、開拓社、2000.

出典：『POIESIS』（関西大学），第32号(2007), 1-15頁.